

## 「宮古島の『保管庫』、実は『弾薬庫』だった」 2019年04月02日

「東京新聞」は4月1日の朝刊に、「宮古島民を『だまし討ちだ』」「『保管庫』実は『弾薬庫』」という見出しで、一面トップの記事を掲載していた。

沖縄の宮古島の陸上自衛隊駐屯配備に関しては、2015年5月、左藤章防衛副大臣（当時）が下地敏彦市長を訪問し、陸上自衛隊とミサイル部隊の配備を打診した。候補地周辺の野原自治会と千代田自治会は8月に、配備反対を決議した。翌9月に、若宮健嗣防衛副大臣（当時）が「ヘリパッドや地对艦・地对空誘導弾を保管する火薬庫を整備する計画はない」と伝え、下地市長は「弾薬庫が一切ないと説明を受けて安心している」と応じた。地元自治会への説明会でも「弾薬庫とヘリパッドは造らない。小銃などの小火器を入れる保管庫を置くだけだ」と繰り返した。2017年11月の駐屯地着工後、2018年2月には、千代田自治会が自衛隊員の自治会への加入や公民館建設を求める陳情書を防衛局と市に提出し、容認に転じ、野原自治会も反対決議を撤回した。宮古島の村民は、「小火器」「小銃」の「保管庫」と聞いて、自衛隊駐屯地建設を受け入れた訳である。

ところが、「『保管庫』にしてはあまりに大きい。弾薬庫ではないか」と、島民有志は不信感を持った。「ミサイル基地いらない宮古島住民連絡会」の清水早子事務局長は、資料を分析しながら気付いた。防衛局が住民説明会で配布した「施設整備概要図」には、「保管庫」と記された建物が二つあった。二つとも、隣接する「事務所」と同じサイズであったが、昨年の秋に独自ルートで入手した工事業者の設計図では、「二つの保管庫」の面積が異なっていた。一つは、4m四方だったが、もう一つは54m×53mで、180倍の大きさであった。「施設整備概要図」の完成イメージ図を見ると、「保管庫」の場所に四角すい状のものが確認された。これは、米軍基地で見られる「弾薬庫」とそっくりである。工事が進むと、弾薬庫を覆ったと見られる盛土が現れ、爆発した際に被害を食い止める土堤も築かれた。清水さんらは、那覇市でのヒアリングでも、参議院員会館でのヒアリングでも「弾薬庫ではないのか」と追及したが、防衛省側は「自動小銃などの小火器を入れる保管庫で、弾薬庫とは違う」と言い張った。

しかし、駐屯地発足から3日後の3月29日、防衛省は取材に対し、「小さい方は発煙筒や導火線などを入れる保管庫であるが、もう一つは誘導弾などの弾薬を詰め、周りをコンクリートで覆い、盛土した弾薬庫だ」と明確に認めた。清水さんは「事実を隠し、虚偽説明を続けたのは許せない。弾薬庫のすぐ横には給油所があり、100mほど離れた場所には民家もある。非常に危険だ」と憤っている。保管庫であると嘘をついて、弾薬庫を造った訳である。地元の市民グループの代表を務める石嶺香織さんは、「住民を守ると言いながら、実際は安心できない生活環境を押し付けている。沖縄戦の記憶から、弾薬庫が真っ先に攻撃されるのは明らか。再び島が標的にされる」と訴えている。駐屯地設備反対から容認に転じた平良信男さんは「防衛局は発射装置だけで、弾薬は一切置かないと説明し、自治会も容認に転じたが、話が違う。防衛局は島民に嘘をつき続けた」と怒っている。

「東京新聞」のスcoop記事を読み、いたたまれない気持ちになった。戦前、戦中、戦後と、沖縄は本土の犠牲になって苦しみ続けて来た。今また、保管庫と偽って、危険な弾薬庫を造っていた。沖縄の7割を超す県民が、辺野古新基地反対を表明しても、工事は続行する。沖縄県民に対する侮辱は、際限がないのか。現在の日本政府が、このような卑劣な形で、戦争準備を進めていることを、私たちは直視し、この政府を一刻も早く、退陣に追い込まなければならない。